



ローカル・デフォルト認知のまちあるき

専修大学人間科学部社会学科 教授 大矢根 淳

はじめに

災害は忘れた頃にやってくると言われます。ですから災害が発生すると、日頃、気にかけてこなかったような思わぬ出来事が発生した、あるいは、思っていた以上の出来事が発生してしまった（未曾有／想定外）として、潜在的には社会的課題が顕在化したとか、だから日頃から注意深く足もとの点検をしておく必要があるとか言われることが常となっています。だとすれば、起こり得ることを想像力逞しく把握・認識して日常生活の中でそれに対峙する術（すべ）を攻めしおけばいいのかもしれませんが、いつも、喉元過ぎれば…、だからおぼつかない。かといって、防災・減災を喧伝しすぎると脅嚇となりかねず…、難しいところです。

そこで考えてみたいのが、「防災！」とことさら喧伝せずとも、（結果的に）防災的機能が設けられているような状況を日常各方面で広く取り揃えておこうという「結果防災」の考え方（大矢根 2012）、あるいは、防災を特別な活動ではなく、「ふだん」の日常の暮らしが、そのまま防災、つまり「まさか」のときの備えになるような、そんな「生活＝防災」を目指しましょうという考え方（矢守 2005）です。こうした結果防災・生活防災の考え方は、地域の日常的生活場面では、どのようにすれば達成できるのでしょうか、筆者の専攻する地域社会学的災害研究の実践的取組事例から考えてみたいと思います。

1. 日課・年中行事と防災

結果防災・生活防災を概説する際にしばしば引用されるのが「土手の花見」でしょう。河川の土手に桜が植えられていて街の名所になっているところも多く、春先には多くの花見客で賑わいます。春先のこの時期に、冬季、土中の氷結で緩んだ堤防を大勢の足で踏み固め、梅雨の増水に備える防災上の工夫といわれています（矢守 2005）。毎年、花見を楽しむことが、結果的に土手普請となっていて、防災機能を担保することに繋がっているのです。防災、普請、動員と言わずとも、年中行事を楽しむ中に防災機能が適切に埋め込まれ・実装されている、近世から続く事例です。いわゆる年中行事の中には、そうした潜在的機能の担保されたものも多いはず



土手の花見（大矢根撮影@狛江市、多摩川）

なのですが、その意義が顧みられることはほとんどないでしょう。でも、それでいいのではないのでしょうか？ 防災！と脅嚇せずとも、実質的にその機能が実装されているのですから（たまにその意義が反芻されれば…）。

こうした角度から考えてみると、安全・安心が実質的に担保されている事象の一つに「街角のフラワーポット」があげられます。住宅地や商店街の一角にフラワーポットが置かれているところが多々あります。これは街に潤いをもたらすものですが、実はもう一つ別の意義を見出すことができます。未明・早朝のウォーキングから午前様ご帰宅の時間帯まで、近隣の年齢各層がここを通り、四六時中これをまなざしています。それら無数の視線の交錯する領域は当該居住者のいわば縄張りですから（領域性の確保）、部外者が悪さをしにくくなる（監視性の強化）というわけです（樋野 2011-）。各所に多数設置される防犯カメラも良さそうですが何よりメンテナンスが大変でコストがかさみます。一方、こうした地区の植栽活動は僅かなコストで豊かなコミュニケーションが醸成されます。花で囲まれた街づくりが、結果的に安全・安心の街づくりとなっているという仕掛けです。

2. 例えば…、防災倉庫と体育倉庫

こうして考えてみると、日常生活のあちこちに、防災に連関して捉えられるモノや出来事があります。

地区の防災倉庫を考えてみます。おおよそ町内会・自治会毎に設えられている防災倉庫。例えば、イザという時、一番最初に使うはずのバールは、それを使おうとして最初に倉庫の鍵を開けるであろう人々の目につくところに置かれているのでしょうか？ 黒っぽいバールはおおかた、若干、目に付きづらい、暗い倉庫の四隅に立てかけられていたり



体育倉庫（名護市立屋部小学校HPより）

しませんか？ 炊き出し用の道具は時系列で考えると、もう少し後に使われるはずですが、真鍮の輝きと共に目立つところに鎮座していますね。

そうした事々を思い起こしながら、小学校の校庭の一角にある体育倉庫を見学してみます。体育倉庫中の諸用具は、全学年の年間の体育カリキュラムに合わせて、使うべき用具を子どもたち自身の手で運び出せるように、季節ごとに先生方が相談して配置しています。運動会が近くなると綱引きの大綱が手前に、サッカーボールやラインマーカーは常時、トビラ付近に置かれています。

という事々を勘案して、防災倉庫を覗いてみます。地元の被害想定への対応シナリオに即して防災倉庫内の資機材が格納されているかどうか。それを使うことになっている人、その人自身によってその場の行動シナリオがまず認識されていることが必須ですね。その認識に基づいて道具が取り揃えられ、しかるべきところに格納されていなくてはならないこととなります。

3. 被害想定から演繹される対応シナリオを考える前に

そこで、私たちの地元では何が起こり得るのか、その際に自分は何をなすべきなのか…、そうした道具を使うであろう人々が、種々の被害想定の中から自身で事象とその展開を特定してみる機会が必要になってきます。

しかしながらここで留意しておきたいことは…。防災をことさら脅嚇するような文脈とならないようにすること、言い換えれば、まずは、結果防災・生活防災の文脈に置き換えて考え始めていくことが肝要だと思います。

そこでここでは、ある「防災まちあるき」の流れを考えてみます。例えばある自治体で、直下型地震の被害想定に基づいた地区住民対応について考えるために「まちあるき」を企画してみた、としてみましましょう。木造老朽家屋の密集地区を歩き、消火栓・街角消火器の配置状況を目視して、自主防災組織の組織図を眺めながら、初期消火、救出救助体制について話し合いました。

阪神・淡路大震災（1995年）以降、木造老朽家屋密集地区の延焼火災の危険性に注目が集まり、防災福祉コミュニティが構想されて、自助・公助・共助が謳われ、さらに東日本大震災以降は、災害時要援護者の支援体制を組み立てることが求められることとなってきましたから、防災まちあるきに参加する自主防災組織の皆さんも意気込み新たでしょう。

ここで腰を折るようで恐縮ですが、私は皆さんに、もっと気楽に自由にワイワイと歩くことを提案します。まず参加していただく方々には、子どもからお年寄りまでの3～4世代、そしてできれば次の世代をお腹に抱える妊婦さんにも参加していただきたい。そして、各世代・事情の方々に、その目に映る・五官で感じる、様々な街のモノや事柄について、思い出や願望とともに自由に語り合っていただきたいと思います。直下型地震・延焼火災に特化した防災事象だけではなく、その方々の五官で捉えられる街のデキゴトの中で、結果的に防災に資するかもしれない「危険」と「資源」を見出しながら、それを口々に表しながら歩いていただきたいのです。

各世代によって表出された街の危険・資源は、そのまま、当該地区で構想しなくてはならな



多世代でまちあるき（やってみよう！ 川崎市多摩区中之島にて）



資源(?)の発見！

い安全・安心課題、そしてそれへの対応法となっていくことでしょう。上意下達で特定されている防災メニューとは異なる生活者の文脈で、その論点が認識されることとなります。

私の大学付近の町内会でこうしたまちあるきをしたところ、工務店とスーパーのフォークリフトが目にとまり、これで倒壊家屋を持ち上げられないか…、との声があがり、いざという時には大工さんにそれをやってもらおう…ということになって、後日話し合



校舎裏の井戸 (やってもいいの？ わーい!)

いははじまりました。雑草の生い茂った空き家（不審火の危険性）、歩いている誰もいじり方の分からない消火栓ボックス、カギの在り処がわからない防災倉庫…。危険と資源、そしてその利用可否…。口々に様々な論点が浮かび上がってきました。

何度かそうしたまちあるきを重ねること、すなわち、ローカルのデフォルト事情を認知する段を経た後に、はじめて想定に沿った地区の防災対策は議論されるべきではないでしょうか。

おわりに ～レジリエンス含意の再考

3～4世代のそぞろ歩きで、地区の人材（財）と資源が再発見されます。このところよく耳にすることばにレジリエンス（resilience）があります。このことばは、そもそも、「地域や集団の内部に蓄積された結束力やコミュニケーション能力、問題解決能力などに目を向けていくための概念装置であり、地域を復元＝回復させていく原動力をその地域に埋め込まれ育まれてきた文化や社会的資源のなかに見いだそうとする」もので、「被災者を主格とする被災コミュニティ自決に基づく生活再建・社会関係再構築の機軸であって、そこにおける被災者・被災地のしなやかな対応力を表したもの」と説明されます（浦野 2007）。ローカル諸事情に根ざした、すなわちレジリエンスを基底とする防災まちづくりは、ここで見てきたように、地区人材（財）の口から発せられる（危険をカバーし得る）資源を彼ら・彼女らの文法で組み立てて行った先に見いだされるものなのではないかと思われまます。地区防災対策としては無駄な回り道に見えるかもしれませんが、このデフォルト認知のひと手間が大切なのではないかと思います。

【参考文献】

- ◇矢守克也, 2005, 「災害文化」『〈生活防災〉のすすめ—防災心理学研究ノート—』ナカニシヤ出版。
- ◇大矢根淳, 2012, 「地域防災活動におけるレジリエンス～川崎市多摩区中野島町会「防災マップ」づくりの事例から～」『かながわ政策研究・大学連携ジャーナル』No. 3
<https://www.pref.kanagawa.jp/documents/22496/480261.pdf>
- ◇樋野公宏, 2011～, 「第19回 緑と防犯(1) 見守りフラワーポット」(「防犯まちづくり」のスメモ)
https://www.arucom.ne.jp/sp_column/column19.html
- ◇浦野正樹, 2007, 「脆弱性概念から復元・回復力概念へ—災害社会学における展開—」『復興コミュニティ論入門』弘文堂